

子どもの心を理解して

NPOあいち障害者センター理事長 近藤 直子



1 「できること」が増えることが「発達」なの？

「発達」という「トバ」は「目に見える変化」でできることが増えること」としてイメージされることが多く、コトバで思いを伝える、片付けをする、仲間と仲良くする等「大人が期待する変化」のこととして考えられがちです。
でも子どもの心が発達すると、実は、できていたことができなくなったり、大人が期待してはいないことをするようになったり



が出始めるのです。「好き」なことを選ぶことに子どもは意味を感じています。そんな「好き」を生活の中で楽しく積み重ねることで、3歳頃には自分の「できる」ことを意識し「できない」ことにも気づいていきます。
4歳前後には、自分が「できないこと」を「できる」仲間にあこがれて、3歳までは選ばなかったことに挑戦し始めますが、

りします。そんな子ども心の不思議を保護者と保育者で共有し、子どもの育ちを慈しんでいただけたら嬉しいです。

2 一見マイナスに見える中にある「発達の芽」

「できていたことができなくなる」姿の一つとして、1歳半以降の「偏食」があります。それまで食べていたものを食べられなくなるのですが、それは親のしつけに原因があるのではありません。1歳後半になると世界



したこのないことは簡単にはできるようにならず心が揺れまです。そうすると手持無沙汰になり、手が鼻の穴や口や髪の毛や性器に向かい「クセ」となって現れます。大人はクセをやめさせようしますが、クセは新たな変身に向かっていて証でもあるのです。揺れる心を支えるために、園ではその子の得意なこ

がクリアに見え始め、子どもは世界の中から「コレ」という好きなものを見つけ出します。その一方で嫌いなものができ、好きを選び、嫌いを「イヤ」と拒否するから偏食や「こだわり」



とを仲間の中で輝かせ、家ではお手伝いをしてもらい「ありがとう」をプレゼントし気持ちを前向きにしたいものです。5歳後半にはポイントを押さえた挑戦が可能になり、揺れが収まりクセはぐっと減ります。
「マイナスに見える姿」の中に子どものステキな心の育ちを見つけるとともに、更なる心の育ちの見通しが持てる子どもを応援しやすくなります。

3 一人で悩まずに

子どもの思いがわかりにくい時、他の子との違いが目につき心配な時は、保育者同士、保育者と保護者で話し合ってください。そして子どもの好きなこと、得

プロフィール

専門は3歳までの発達理解と発達支援。18か月児健診後の発達相談を担当して52年になります。
日本福祉大学名誉教授
全国発達支援通園事業連絡協議会会長

意なことを楽しく広げ、仲間の中で輝かせる「昼間の生活」を保障しましょう。子どもには生まれながらの持ち味がありますから、子どもの持ち味を活かして輝かせるために何に取り組むのか、大人たちで考え合いたいですね。
朝晩過ごす家では、大人も子どもも甘えん坊でマイペースなのが当たり前です。昼間の生活で世界を広げているのですから、家では「いい加減でもいいかな」と割り切り、一番甘えん坊な寝る前に、子どもを「大好き」と抱きしめて安心をプレゼントしてください。

